

翻訳から見えてくる日本語らしさ  
——日独語の出来事の捉え方をめぐって——

大藪正彦（静岡大学）

1. 言語研究と翻訳

1.1 対照研究の苦悩？

(1) 白川博之「実例か作例か」(『くろしお NEWS』18号, 1999)

- ・実例にあたる必要性: ①直観は意外と当てにならない ②作例は思い込みで左右されやすい ③作例は問題発掘には不向きである
- ・実例には実例の問題: ①用例採集は地味で根気が要る ②信用できる材料を選ぶのは難しい ③収集の網に掛らない用例もある ④混沌とした言語現象を解きほぐすには相応の洞察力が必要である

(2) 池上嘉彦「言語学は翻訳の役に立つか」(『論座』2007年9月号)

- ・(翻訳は言語学の役に立つか) 答えはもちろん「どのような〈言語学〉を考えるか」ということ次第であるが、筆者自身のような関心の持ち方からすると ... おおいに役立つはずのものと言うほかはない。
- ・認知言語学と呼ばれる言語研究のもっとも新しいアプローチでの関心からすると、翻訳は無言のインフォーマント(情報提供者)のようなもので、人間言語で何が可能で何が不可能化を考えるのに興味のない資料を提供してくれる。
- ・(言語学は翻訳の役に立つか) 翻訳者自身のスタンス次第ということになる。

(3) アメリカ翻訳者協会の倫理規定より<sup>1</sup>

We the members of the American Translators Association accept as our ethical and professional duty

1. to convey meaning between people and cultures faithfully, accurately, and impartially ...

(人與人、文化と文化の間に、意味を忠実に、正確に、公正に伝えることを受け入れなければならない)

1.2 翻訳方法の多様性

(4) 藤濤(2007)による分類

- ①移植 (STの綴りをそのまま導入する)
- ②音訳 (STの音声面を導入する)
- ③借用翻訳 (語の構成要素の意味を訳す)
- ④逐語訳 (一語一語を対応させて訳す)

} ST (起点テキスト) 志向的

<sup>1</sup> [https://www.atanet.org/governance/code\\_of\\_ethics.php](https://www.atanet.org/governance/code_of_ethics.php)

- ⑤パラフレーズ（同じ内容を別の表現に言い換える）
  - ⑥適応（目標文化に合わせて調整・変更する）
  - ⑦省略（STの要素を全く削除する）
  - ⑧加筆（STに含まれていない要素を加える）
  - ⑨解説（注などによりメタ言語的に説明する）
- } TT（目標テキスト）志向的

### 1.3 逐語訳と意識（パラフレーズ）の間

- (5) 言語学論文のグロス (gloss)
- atama ga ita-i.            〈アタマ ガ イタ-イ〉  
 Kopf NOM weh-PRS        頭 主格 痛い-現在  
 »Kopf fühlt sich weh an«    »頭が痛く感じられる«    )    (Löbner 2016: 170)
- (6) a. Den alten Heilandt stimmte Schugger Leos Anblick heiter. 〈年老いたハイラントをシュガー・レオの眺めが快活にした〉(G.グラス「ブリキの太鼓」)  
 b. ハイラント老人はシュガー・レオの姿をみて、快活になった。(高本研一訳)
- (7) a. ... ich fürchtete, sie würden mir mein Weib **zu Tode tanzen**. 〈私は彼らが私の妻を踊って死なせてしまうのではないかと心配した〉(Th. シュトルム「うずしお」)  
 b. みんなして、わたしの妻を踊り殺してしまいやしないかと、心配したくらいだった。(国松孝二訳)
- (8) a. Das **junggeglühte Männlein** (グリム童話のタイトル)  
 b. わかくやきなおされた小男 (金田鬼一訳)  
 c. 火に焼かれて若返った男 (野村滋訳)
- (9) a. Bald wurden die Schatten länger als sie selbst und sie fuhren nach Hause. 〈やがて影が彼ら自身よりも長くなりました。そして彼らは家へ帰りました〉(H.ハイネ「ともだち」)  
 b. いつのまにか かげが ながくなった。3びきの せたけよりも ほら こんなに。さあ うちへ かえろう。(池田香代子訳)

### 1.4 意識（パラフレーズ）と翻案（アダプテーション）の間

- (10) 「みつけ鳥」(原文のドイツ語は省く)
- a. むかしむかしあるところに、森を見まわる役人がいました。この人が獵をしに森のなかに入っていくと、泣き声が聞こえてきました。なんだか赤んぼうの声のようでした。森の役人がその声を追っていくと、しまい高い木のところに出ました。見あげると、木のうえのほうに赤んぼうがいました。(野村滋訳)
- b. ある日 男が でかけた 森へ / どこかで するよ 泣き声が / 声のする方 歩いて びっくり / 小さな子ども 枝に 置きざり (つつみ あれい「みつけちゃん」)

(11) 「猫とねずみのとも暮らし」

- a. 猫がねずみと知りあいになりました。そして、あんたが好きだ、仲よしになろう、というようなことをさんざん聞かせたものですから、とうとうねずみもその気になって、猫といっしょにひとつ家に住み、暮らしをともにすることにしました。(野村滋訳)
- b. 教会の前の広場で猫はうろたえました。しまった、と思いました。猫の前にはねずみがおりました。ねずみは燃えるような目で猫をにらんでおりました。教会の屋根に十字架がそびえておりました。(町田康「猫とねずみのとも暮らし」)

(12) 「赤ずきん」

- a. むかしむかしあるところに、かわいらしい小さな女の子がいました。だれでもひと目見ると、この子がかわいくなりました。でも、いちばんかわいがったのは、この子のおばあさんです。(野村滋訳)
- b. あたい赤ずきん。スカウまれのスカ育ち。犬は飼ってるケードー、透明な犬であたいにも見えないんだ。ずっとこの店に出てるケードー、お酒とか飲めないカーラー、リンゴジュースちびちびやりながら、マグロ船ドンデコスタ丸で出ていったジョーに手紙を書く。(いしい しんじ「赤ずきん」)

2. 出来事の捉え方

2.1 事態把握とは何か

2.2 二つの事態把握

(13) a. 今は武蔵の国になりぬ。(更級日記)

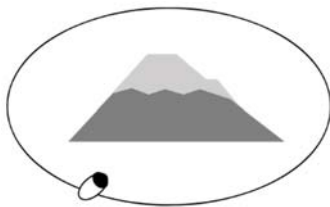
- b. Jetzt waren **wir** in der Provinz Musashi. 〈今や私たちは武蔵の国にいた〉(U. Kemper 訳)

(14) a. まもなく静岡です。(新幹線のアナウンス)

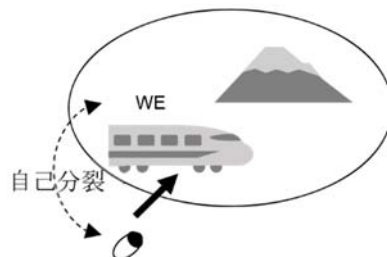
b. **We** will soon make a brief stop at Shizuoka.

c. In Kürze erreichen **wir** Shizuoka Hbf. 〈まもなく私たちは静岡中央駅に到着します〉

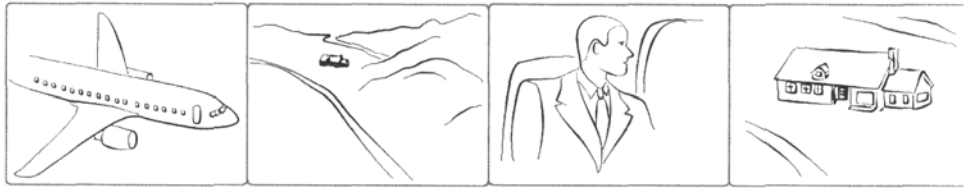
【図1】自己中心的な視点



【図2】自己分裂的な視点

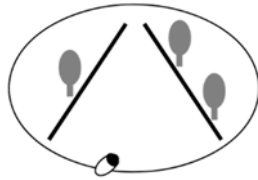


【図3】主観カメラ (Müller 2010: 102)

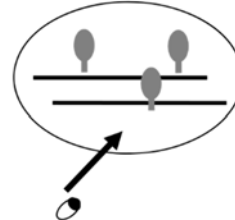


- (15) a. <sup>このみち</sup> <sup>ゆくひと</sup> 此道や行人なしに秋の暮 (芭蕉)  
 b. Diesen Weg / geht niemand / an diesem Herbstabend.  
 〈この道を / 行く人はいない / この秋の暮に〉 (D. Krusche 訳)

【図4】自己投入的な読み



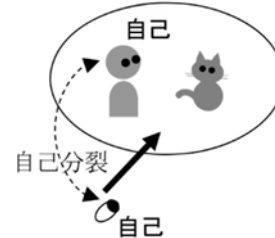
【図5】客観的な読み



【図6】主客合一+自己投入



【図7】主客対立+自己分裂



(16) Ikegami (2015) ほか

a. 主客合一的な事態把握 (主観的事態把握)

話し手は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話し手は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする (自己投入)。

b. 主客対立的な事態把握 (客観的事態把握)

話し手は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話し手は (自分の分身をその事態の中に残したまま) 自らはその事態から抜け出し、事態の外から、傍観者ないし観察者として客観的に (自己の分身を含む) 事態を把握する (自己分裂)。

### 2.3 事態把握と翻訳(1) ——空間と知覚

- (17) a. そのとき背後で小さな笑い声のようなものが聞こえた。ナカタさんが後ろを振り向くと ... 美しい細身のシャム猫が ... こちらを見ていた。(村上春樹「海辺のカフカ」)
- b. Auf einmal ertönte **hinter ihnen** ein leises Lachen. Als Nakata sich umwandte, sah er ... eine schöne schlanke Siamkatze, die ... **zu ihnen** herüberschaute. 〈突然彼らの後ろで小さな笑い声が響いた。ナカタさんが振り向いたとき、彼は彼女らの方を見ている美しい細いシャム猫を見た〉(U. Gräfe 訳)
- c. Just then Nakata thought he heard a small laugh **behind him**. He turned and saw ... a lovely, slim Siamese looking **at him**. (Ph. Gabriel 訳)
- (18) a. [問題はハイヒールだったが] 事務所に行けばジョギング・シューズ ... が置いてあると彼女は言った。(村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」)
- b. ... sie meinte aber, daß **im Büro Joggingschuhe ... stünden**. 〈事務所にジョギング・シューズが置いてある、と彼女は言った〉(A. Ortmanns/J. Stalph 訳)

注：逐語的な訳が不可能というわけではない

- c. Wenn wir zum Büro gehen, stehen da Joggingschuhe 〈我々が事務所へ行けば、そこにジョギング・シューズがある〉
- d. ... but she said **she had jogging shoes ... at the office**. (A. Birnbaum 訳)
- (19) a. Wir fahren durch Weinberge ..., **manchmal gab's einen Steinbruch** ... 〈ぼくたちはブドウ畑を抜けて走った。ときどき採石場があった〉(B. シュリンク「朗読者」)
- b. We were driving through vineyards ..., and **sometimes there were quarry** ... (C. B. Janeway 訳)
- c. ぼくたちはブドウが栽培された山あいの道を ... 走っていた。... ときどき採石場があり ... (松永美穂訳)

### 2.4 事態把握と翻訳(2) ——自己と他者

- (20) a. あれ!? ゆきが ふって ないよ! / 「ママ, ママ, そとに いって いいでしょ。ゆき やんでるよ。」(酒井駒子「ゆきがやんだら」)
- b. »Guck mal! Es hat aufgehört!« / »Mama, Mama, jetzt darf ich doch raus?« 〈「ねえ見て! やんだよ!」 / 「ママ, ママ, もうそとにでてもいいよね?」〉(U. Gräfe 訳)
- (21) a. »Mir scheint, **du** faselst und bist nicht ganz klar im Kopf ...« 〈「俺には、お前はばかなことを言って頭がどうかしているように思える」〉(Th. マン「魔の山」)
- b. And then he added, "It seems **to me you**'re talking drivel, that you're a little muddleheaded." (J. E. Woods 訳)
- c. 「うわ言をいったりして、頭がはっきりしていないような気がする ...」(高橋義孝訳)

- (22) Nach dem Bahnhof **kommt** gleich rechts ein großes Kaufhaus. (駅のあとすぐ右側に大きなデパートが来る)
- (23) Wie fühlen **wir** uns heute? (今日の調子はどうかな 英: How are **we** feeling today?)
- (24) a. ぼく, ちょっとの間ひとりでも平気? (高橋留美子「めぞん一刻」)  
 b. **Dürfen wir mal ein Weile alleine sein?** (私たち [=聞き手とは別の私たち] ちょっとの間二人だけになっていいかしら) (C. Caspary 訳)

#### 疑似共感用法<sup>2</sup>

- (25) (ひじが子どもの頭にぶつかって、子どもが泣き出した)  
 あ, 痛かったねえ。ごめんね。(井上 2006: 174)

ただし:

- (26) (夏の暑い日, 冷房のない話し手の家に知人が遊びに来た。知人が帰宅する際に, 「暑くて申し訳なかったねえ」という気持ちで)  
 a. 冷房 ナーテ アツカッタネー。(井波方言/富山県)  
 b. \*冷房がなくて暑かったねえ (よねえ)。(井上 2006: 173)

「来る」の方言用法 (九州, 山陰, 北陸などの一部)

- (27) A: 今カラコッチニ来ン?  
 B: ウン, ジャスグ来ルケン。(陣内 1991: 91)

### 3. おわりに

- (28) a. **Bald wurden die Schatten länger als sie selbst und sie fuhren nach Hause.** (やがて影が彼ら自身よりも長くなりました。そして彼らは家へ帰りました) (=9a)  
 b. いつのまにか かげが ながくなった。3びきの せたけよりも ほら こんなに。さあ うちへ かえろう。(=9b)
- (29) a. ある日のことです。ひさしぶりに まどをあけてみると…… なんていいお天気でしょう! (湯本香樹実「くまとやまねこ」)  
 b. **Eines Tages, nach langer Zeit, öffnete er wieder einmal das Fenster und die Sonne strahlte ...** (ある日, 久し振りに, くまは再び窓を開けてみました。すると太陽が輝いていました) (U. Gräfe 訳)
- (30) a. <sup>ひとつや</sup>一家に遊女もねたり萩と月 (芭蕉)  
 b. **Wir schliefen alle unterm gleichen Dach: / Dirnen und Ginsterblüten, / der Mond und ich.** (我々はみんな同じ屋根の下で眠った / 遊女とエニシダの花 / 月と私) (D. Krusche 訳)

<sup>2</sup> 「聞き手に負担をかけた話し手が, 疑似的に聞き手と同じ立場に立ち, 相手にかけた精神的負担を自分でも感じてみせることで, 聞き手との関係修復を図る」(井上 2006: 174)。

- (31) a. 閑<sup>しずか</sup>さや岩にしみ入<sup>いる</sup>蟬の声 (芭蕉)  
 b. Oh, diese Stille: / Selbst durch die Felsen dringt doch / Des Heimchens Zirpen. 〈おお、この静けさ / 岩にさえしみ入る / イエコオロギの声〉 (J. Ulenbrook 訳)
- (32) a. 白菊の目にたてゝ見る塵もなし (芭蕉)  
 b. Die weiße Aster, / Die dort vor Augen steht, / Zeigt nicht ein Stäubchen. 〈白いアスター / そこの目の前に立っている / 塵一つ見せない〉 (J. Ulenbrook 訳)

#### 参考文献

- 藤濤文子 (2005): 「日独語翻訳にみる異文化間コミュニケーション行為」『ドイツ文学論集』(神戸大学) 34, 31-50.
- 藤濤文子 (2007): 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション』松籟社.
- Haiman, John (1995): Grammatical Signs of the Divided Self. In: Werner Abraham et al. (eds.): *Discourse, Grammar and Typology*. Amsterdam: Benjamins, 213-234.
- 濱田英人 (2016): 『認知と言語』開拓社.
- Hartmann, Peter (1952): *Einige Grundzüge des japanischen Sprachbaues*. Heidelberg: Winter.
- 本多啓 (2005): 『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会.
- 本多啓 (2011): 「共同注意と主観性」澤田治美 (編) 『主観性と主体性』ひつじ書房, 127-148.
- 本多啓 (2013): 『知覚と行為の認知言語学』開拓社.
- 池上嘉彦 (2000/2007): 『日本語論への招待』講談社. [『日本語と日本語論』筑摩書房, 2007]
- 池上嘉彦 (2003; 2004): 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (1); (2)」山梨正明ほか (編): 『認知言語学論考 No. 3; No. 4』ひつじ書房, 1-49; 1-60.
- 池上嘉彦 (2007): 「言語学は翻訳の役に立つか」『論座』9月号, 200-205.
- 池上嘉彦 (2011): 「日本語と主観性・主体性」澤田治美 (編): 『主観性と主体性』ひつじ書房, 49-67.
- Ikegami, Yoshihiko (2015): ‘Subjective Construal’ and ‘Objective Construal’. In: *Journal of Cognitive Linguistics* 1, 1-21.
- 池上嘉彦/守屋三千代 (編) (2009) 『自然な日本語を教えるために』ひつじ書房.
- 井上優 (2006): 「モダリティ」小林隆 (編) 『方言の文法』岩波書店, 137-179.
- 陣内正敬 (1991): 「「来る」の方言用法と待遇行動」『国語学』167, 15-23.
- 金谷武洋 (2004): 『英語にも主語はなかった』講談社.
- Krusche, Dietrich (Hg.) (1994): *Haiku*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- 熊倉千之 (2011): 『日本語の深層』筑摩書房.
- Langacker, Ronald W. (2008): *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Löbner Sebastian (2016): Wovon wir reden, wenn wir von Gefühlen reden. In: Akio Ogawa (Hg.): *Wie gleich ist, was man vergleicht?* Tübingen: Narr, 169-190.
- 水野真木子 (2005): 「各種通訳倫理規定の内容と基本理念」『通訳研究』5, 157-172.
- 森田良行 (2006): 『話者の視点がつくる日本語』ひつじ書房.
- Müller, Arnold Heinrich (2010): *Geheimnisse der Filmgestaltung*. 2. Aufl. Berlin: Schiele & Schön.
- 中村芳久 (2004): 「主観性の言語学」中村芳久 (編) 『認知文法論Ⅱ』大修館書店, 3-51.
- 中村芳久 (2009): 「認知モードの射程」坪本篤朗ほか (編) 『「内」と「外」の言語学』開拓社, 353-393.
- 成田節 (1995): 「„Perspektive“ の概念について」『大阪市立大学人文研究』47 (10), 161-177.
- 尾野治彦 (2018): 『「視点」の違いから見る日英語の表現と文化の比較』開拓社.
- 大藪正彦 (2018): 「ドイツ語の事態把握をめぐって」中村芳久教授退職記念論文集刊行会 (編) 『ことばのパースペクティブ』開拓社, 28-40.
- 大藪正彦 (2019): 「事態把握と翻訳」今野喜和人 (編) 『翻訳とアダプテーションの倫理』春風社, 135-162.
- 白川博之 (1999): 「実例か作例か」『くろしお NEWS』18, 4.
- Talmy, Leonard (1988): The Relation of Grammar to Cognition. In: Brygida Rudzuka-Ostyn (ed.): *Topics in Cognitive Linguistics*, Amsterdam, 166-205.
- 鳥飼玖美子 (編) (2013): 『よくわかる翻訳通訳学』ミネルヴァ書房.